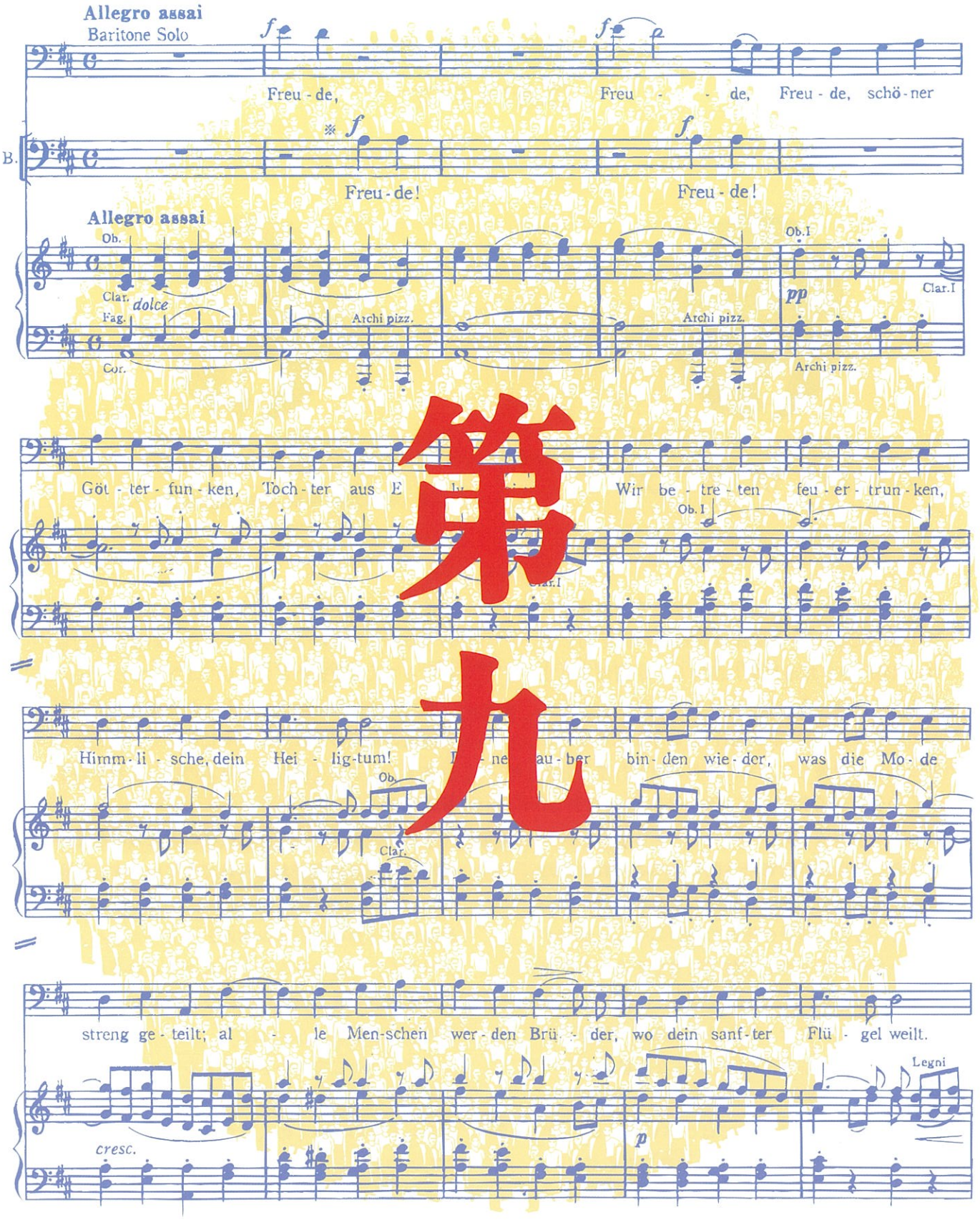


第九

2011春日井市民第九演奏会

とき 2011.12. 4 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催　春日井市、春日井市教育委員会、(公財)かすがい市民文化財団、春日井市民第九演奏会実行委員会

共催　春日井市交響楽団、春日井市民第九合唱団

後援　中部大学、中日新聞社

ごあいさつ

春日井市長　伊藤　太

本年も、春日井市民第九合唱団、春日井市交響楽団をはじめとする関係の皆様方の御尽力により、「2011春日井市民第九演奏会」が開催されますことを、誠にうれしく思います。

平成5年12月に市制施行50周年記念事業のひとつとして開催して以来、年末の恒例行事として多くの皆様が心待ちにされているこの演奏会も、19回目となりました。

このように長きにわたり開催してこられましたのも、市民生活と密着した身近な会場での演奏会として、また出演者の皆様の熱のこもった演奏が幅広い世代の方々の心を魅了してやまないからだと推察いたします。

本日の演奏会には、国内外でご活躍の指揮者やソリストを迎え、「第九」のさらなる魅力が引き出されるものと期待しております。

慌ただしく感じる師走ではございますが、「第九」の調べをどうぞごゆっくりお楽しみください。

2011春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学 学監　三浦昌夫

多くのみなさんと共に歌い、奏で、聴く、本年の「春日井市民第九演奏会」こそ、いまの私たちにとって大きな慰めとなるものはないでしょう。

私たちの心は、いまだなお、おさまらぬ東日本大震災の脅威の下にいる人々に向けられたままでいます。ここで「歓喜」を叫ぶのは、まだ早いかも知れません。

しかし、世界中から、被災者の方たちに多くの援助と激励の言葉がおくられてきています。同様に、この「春日井第九」にも、おとなりの韓国から、指揮者のチヨン・チュンさんとテノールのハ・ソクベさん、バスのキム・ミンスクさんがそろってきてくださいました。いつになく、とても心強いものを感じます。

ソプラノの二宮咲子さんとアルトの三輪陽子さんを加えた、この「春日井第九」の力強い歌声が、私たちも含め、多くの人たちに勇気と希望を与えるものであり、来年こそ、日本中がよき年でありますように、切に願うものであります。

プログラム
Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG　VAN　BEETHOVEN（1770-1827）

交響曲第9番 二短調 作品125「合唱付」
Symphony No.9 in d-minor op.125 “Choral”

第1楽章　アレグロ　マ　ノン　トロッポ，ウン　ポコ　マエストーソ
1mov.　Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章　モルト　ヴィヴァーチェ
2mov.　Molto vivace

第3楽章　アダージョ　モルト　エ　カンタービレ
3mov.　Adagio molt e cantabile

第4楽章　フィナーレ，プレスト–アレグロ　アッサイ–レシタティーヴォ–アレグロ　アッサイ
4mov.　Finale,Presto –　Allegro assai –　Rezitativo –　Allegro assai

指揮者
Conductor
チヨン・チュン
Chi-Yong Chung

ソプラノ　Soprano
二宮　咲子
Ninomiya Sakiko

アルト　Alto
三輪　陽子
Miwa Youko

テノール　Tenor
ハ・ソクベ
Ha Sokube

バス　Bass
キム・ミンスク
Kim MinSuk

Music director
音楽監督　**都築　正道**
Tudzuki Masamichi

Chorus master
合唱指揮　**滝沢　博**
Takizawa Hiroshi

管弦楽　**春日井市交響楽団**
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

合　唱　**春日井市民第九合唱団**
KASUGAI CIVIL CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

「第九」定訳への道

2011春日井市民第九演奏会
音楽監督　都 築 正 道

みなさまには今年もまた、春日井市民による熱意と力あふれる「第九」をお聞きいただくことができます。毎年行われる春日井市恒例の年末の「第九」ですが、本日の「春日井第九」もまた、合唱団が素晴らしい歌声をお聞かせすることでしょう。言葉が明瞭で、発声も美しく、笑顔が絶えず、自信を持って歌います。その姿はきっと、例年以上にみなさまを満足させることでしょう。これは、オーケストラも同じです。なぜかといえば、私たちはシラーの詩を十分に理解して、歌い、演奏しているからです。

定訳を試みる　ベートーヴェンの「第九交響曲」の終楽章は、シラーの詩「歓喜に寄せる頌歌」(An die Freude)をテキストにして人類愛を歌ったものです。シラーの詩が難解であるため、これまで、日本人による厳密で、学問的な「テキスト・クリティーク」(原典判読)による「定訳」がありませんでした。2001年7月に愛環音楽連盟が、シラーの研究家、内藤克彦南山大学名誉教授をお招きして、岡崎市でシンポジウムを開きました。「"An die Freude" の詩と真実」がそれです。そのとき内藤克彦先生が、シラーの原典を丁寧に読み解き、多くの資料を駆使して、この詩の全文をお訳しになったのが別掲のものです。ここには、これまで疑問に感じていた「解釈」や「訳語」が極めて明快に解決され、訳されています。この「内藤訳」を私たちの「定訳」としています。

神々の火花　例えば、この詩でもっとも重要な言葉 "Fruede" は、内藤訳では「喜び」となっています。単に「喜び」だけでは、特別の言葉のようには感じられません。「なんに対する」「どんな内容の」喜びなのか、良く分からないからです。そこで、次の言葉 "Gotterfunken" と "Eysium" が大きな意味を持ってきます。この二つの言葉について、内藤先生は次のように述べます。まず "Gotterfunken" です —「この語が、天来のものと言っていいほど純粋で崇高な喜びの感情を表現した一つのメタファー(『神々の火花』のような[すばらしい]喜び)であることを現わしています。しかし、そのような説明を総合して、この語に簡潔でしかも適切な日本語の訳語を振り当てることは容易ではありません。『神々のひかり』、『神々のかがやき』、『神々のきらめき』、『天来のひかり』など、いろいろ考えられます。しかし、この語が喜びを神から火花のように放射されたものとして表現しているとすれば、多くの訳がそうであるように、一応『神々の火花』としておくのがいいようにも思えるのです。詩の訳語としては硬いので、もう少し詩的な訳語はないものかと考えられるのですが、適訳を案出するのは、至難のわざであるように見えます」(愛環音楽連盟発行『"An die Freude" の詩と真実』所収)。

聖なる喜び　それで結局、内藤訳は、「神々の火花」に落ち着くのですが、私たちは「第九」の "Fruede" は、「『神々の火花』のような[すばらしい]喜び」であることを知ることになります。さらに内藤先生は、ゲーテの青年期の詩『プロメートイス』に言及して、そこに見られる「聖なる炎に燃える心」という表現から、シラーの "Fruede" も「聖なる炎に燃える心」の喜びであると指摘します。

喜びの諸相　さらに内藤先生は、"Eysium"から "Fruede" を読み解きます —「シラーにおいては、魂のふるさととしての精神的愛における幸せな状態を言い表すものとして用いられています。とすると、『Elysium生まれの娘』と言い換えられる『喜び』は、そのような精神的愛、の幸せの中から生まれたものということになりますが、しかもそれが『天上のものよ』と呼びかけられ、『きみの聖所』という表現さえ用いられるからには、それは動物的な快楽であるはずはなく、天使たちとも共有できる、極めて神聖な、精神的な、霊的な喜びである、と解釈しなければならないと思います」。

初めての勉強会　この愛環音楽連盟のシンポジウムを受けて春日井でも、「第九」をより正しく理解して、より正確な発音で歌うために、同じ "An die Freude" についてのシンポジウムを開きました。合唱団員を中心に、一般の市民のみなさまと一緒にシラーの詩の解釈とドイツ語の発音に本格的に取り組んだのは、第9回の2001年からです。その時の講師は、ドイツ文学者の小黒孝友先生と中部大学助教授の小黒びるぎった先生です。孝友先生は、シラーの詩の構造について話してくださいました。そのときのお話を、次のようにまとめてみました。下手なまとめかたなので、責任は私(都築)にあります。

アクセント　詩を、歌として歌うときにもっとも必要なことが二つあります。アクセントと韻です。まずアクセントですが、シラーのこの詩は、「トロカイオス」(trochaios)といわれる「強・弱のアクセント」の単語ばかりを並べて作られています。どこまでいっても、同じ「強・弱」のアクセントがつづいていきます。この詩の規則的なアクセントに乗ってリズムを作っていけば、言葉と音楽の一致を計るのに十分でしょう。

Fréude, schöner Götterfúnken,
Tóchter áus Elysiúm,
Wir betréten féuertrúnken,
Himmlische, dein Heiligtúm.
Deine Záuber bínden wieder,
Wás die Mode strénge geteilt;
Álle Ménschen werden Brüder,
Wo dein sánfter Flügel weilt.

韻　詩のもう一つの重要な要素は、「韻」(いん)です。詩の各行 — これを「聯」(れん)といいます — の終わりの単語が、同じ発音の語尾をもっています。例えば、第一行目の "Gotterfunken" (神々の火花)と第三行目の "feuertrunken" (火のように酔って)が、語尾が同じ "-en" で終わっていることにお気づきでしょう。また、二行目の "Eliysium" (楽園)と四行目の "Heiligtum" (聖所)とが、同じ "-um" で終わっています。これを、[a-b-a-b] の「対韻」といいます。

音楽のデッサン　このように、詩人は同じことを現わすにも、その言葉が「どんなアクセントなのか」「どんな語尾を持っているのか」を、十分に考えてから一つの言葉を決めるのです。ですから、「聖なる場所」を現す言葉がたくさんあるからといって、ここでは、アクセントも韻も同時に一致しないような言葉、例えば、"Himmel" (天国)や "Paradeis" (パラダイス)という言葉は使えないのです。アクセントと韻を意識しながら歌えば、自ずと音楽のフレーズが決まってきて、音楽全体のデッサンもはっきりしたものとなるでしょう。

抱擁韻　韻についていえば、ただ一ヶ所だけ [a-b-a-b] の対韻ではなく、[a-b-b-a] になっているところがあります。後半の「抱き合え」のところです。

Seid umschulingen, Millionen !
　抱き合え、百千万の人々よ!
Diesen Kuss der ganzen Welt !
　このくちづけを全世界に!
Bruder ! — überm Sternenzelt
　兄弟たちよ－あの星空の上には
Muss ein lieber Vater wohnen.
　一人の慈父が住み給うに違いないのだ

これは、「抱擁(ほうよう)の主題」による短い合唱曲です。この聯の韻だけは他の聯の韻と大きく違っています。最初と最後の聯が [-en] で、真ん中の二つの聯が [-elt] なので、[a-b-b-a] になっています。「どうしてかといえば、[a] が前後にいて、[b] を抱く形、すなわち『抱擁』を現しているからだ」と、以前、中部大学教授(当時)のドイツ文学者伊藤泰治先生が教えて下さいました。詩人と美学者と理想主義者であったシラーのすべてが、ここにある思いがします。

ラインラント　次に、ベートーヴェンと同じボン生まれのびるぎった先生が、ベートーヴェンの音楽と「ドイツ語の発音」についてお話して下さいました。まず、ドイツの地図を見せて「ベートーヴェンはボンで生まれました。ライン川に沿ったボンは『ラインラント』(ライン川地方)の一つです。ラインラントの人はへそ曲がりですから、ベートーヴェンの音楽も多分にそんなところがあるのでしょう」。ただし、びるぎった先生はとても素直な方です。ベートーヴェンのお祖父さんは、オランダからやってきました。ボンは、オランダにとても近いのです。ベートーヴェンのお父さんは宮廷の歌手でしたが、音楽の教え方はあまり上手ではありませんでした。11歳のベートーヴェンの音楽的才能を育てたのは、優れた教師のネーフェでした。ベートーヴェンが、シラーの 'An die Freude' の詩を初めて作曲したのは、19歳のときでした。孝友先生は、「これはお酒を飲むときの歌です。作曲したベートーヴェンも一緒になって歌ったことでしょう。」とおっしゃいます。ベートーヴェンは、シラーのロマン的で、革新的な詩に強く魅了されたのです。これが、その後のベートーヴェンの芸術のありかたを決めたものとおもわれます。

天使の世界　そしてびるぎった先生は、シラーの詩を朗読しました。それはそれは、大変に美しい魅力的なドイツ語でした。びるぎった先生の読む詩だけを聞いていても、詩と音楽が結びついた、崇高な天使の世界に遊ぶ思いがしました。まさに "Eliysium" であり、"Heiligtum" でした。

「第九」の真理　そして、お二人の小黒先生は、シンポジウム終了後、そのまま合唱団の練習に残って下さいました。お二人は、前合唱指揮者の吉川朗さんと一緒になって、実際の練習で歌われる一つ一つの言葉について、丁寧にダメを押していました。そのとき、シラーの詩の正しい読み方と発音をとおして、「第九の真理」に一歩でも近づくことができた私たちは、どんなに幸せであったことでしょう。その「喜び」を、本日みなさまと共に分かち合いたいのです。

それでは、シラーの詩 "An die Freude" の全文を、内藤訳で読むことにいたしましょう。

'An die Freude' 対訳

内藤克彦　訳

An die Freude

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Chor
Seid umschlungen, Millionen !
Diesen Kuß der ganzen Welt !
Brüder — überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein !
Ja— wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund !
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund !

Chor
Was den großen Ring bewohnet,
Huldige der Sympathie !
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thronet.

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn uberm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonnen aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びに

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

合唱
抱き合え、百千万の人々よ！
このくちづけを全世界に！
兄弟たちよ－あの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性をかち得た者は、
声を合わせて歓呼せよ！
そうだ－ただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は！
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい！

合唱
この大地球に住む者は、
共感を信奉せよ！
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪しきものも、みな、喜びの
ばらの道を追い求めてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快楽は、虫けらに与えられ、
神の前に立つのは、智天使だ。

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
歯車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

Chor
Duldet mutig , Millionen !
Duldet für die bess're Welt !
Droben überm Sternenzelt
Wird ein großer Gott belohnen.

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreun.
Groll und Rache sei vergessen,
Unserm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

Chor
Unser Schuldbuch sei vernichtet !
Ausgesöhnt die ganze Welt !
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut—
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
Dieses Glas dem guten Geist !

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben !

Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwornen Eiden,
Wahrhert gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut !

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldnen Wein,
Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Stermenrichter !

合唱
星々が天空の壮麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美徳のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を導く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち砕かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つのが見える。

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ！
よりよい世界のために耐え忍べ！
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出て、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不倶戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

合唱
われらの黒表は破棄しよう！
全世界は和解せよ！
兄弟たちよ－あの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む—
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来らば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあの善い霊に向かって上げよ！

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い霊に、グラスを上げよ！

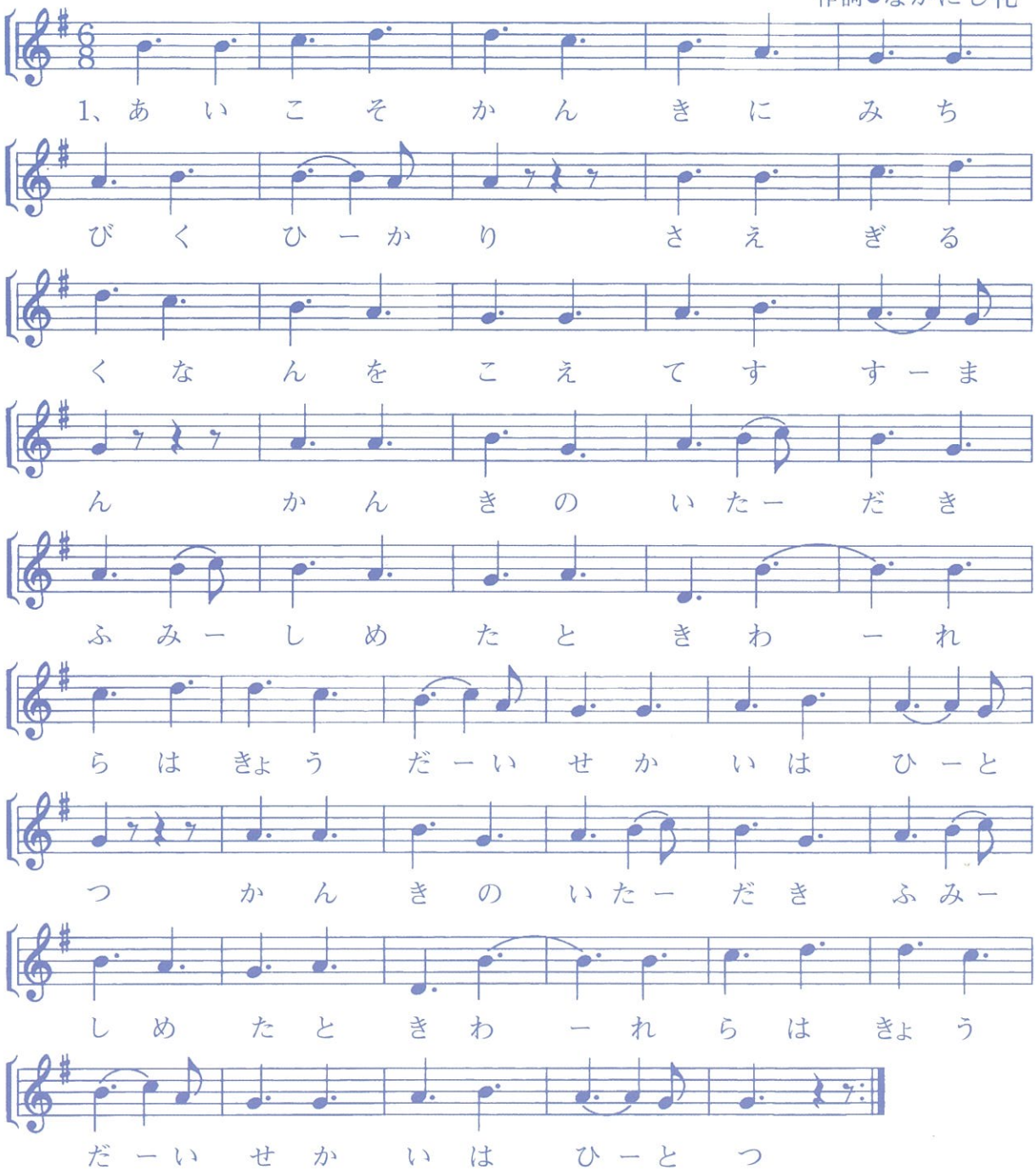
重い悩みには不抜の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には真実を、
玉座の前では男子の誇りを —
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも —
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を！

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え！

みんなで歌おう、春日井賛歌を・・・・

＜歓喜の歌＞

作詞●なかにし礼



1．愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2．気高(けだか)き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼(かんこ)の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ

日本音楽著作権協会(出)許諾第1111581-101号